
律令制成立期の武器と武術

笠井和広

一. はじめに

人類の歴史は闘争の歴史でもあり、戦いは絶えず繰り返され、自分自身の生命や種族・集団を守るために互いに争ってきた。日本国内では、およそ紀元前三世紀以後に地域的政治集団といえる小国家が数多く生まれ、その政治集団による収奪や自衛の戦いが絶えず争われていた。その間に大和朝廷により国内統一が進められ、おそくとも四世紀半ばには国内統一された。

この統一期の大和朝廷は政治組織や税制を統制し、権力を維持するためにも地方首長層を支配しつつ、強大な武力をつくりあげていくのである。そのころは支配者や有力豪族の墳墓が造営され、墳墓の副葬品や埴輪から当時用された武具・武器が知ることがで、さらにその武具・武器により戦闘の様相も推測される。

その後朝廷は、積極的に大陸に使者を遣わし、経典をはじめとする多くの文物が国内にもたらされ、なかには軍事に関するものもあり、これらをもとに律令が制定され、天皇を中心とする軍事的中央集権国家が成立するのである。この中央集権国家の軍事面は唐の制度にならい制定された律令において、整備・制度化している点で、統一以来、国内外での抗争を経験した朝廷が国内における権力維持や外敵からの防衛のためにも、広汎な武力をもち掌握する必要があったからである。

このように広汎な武力を持ち、中央集権国家成立とともに軍事機構を誕生させた背景には、特に白村江の戦いと壬申の乱という二つの歴史的大きな戦いにおいて舶載・国産の数多くの武器を使用し、大陸からもたらされた戦術などをもちいての戦いの結果からであったのである。そして、この律令軍制国家は各国に軍団兵士制を組織し、国ごとの軍団兵士に訓練をおこない軍備を充実させ、戦術・戦闘技術が発達するのである。

二. 軍団制

律令制下の軍団制は701（大宝元）年に制定された「大宝律令（軍防令）」にもとづき一般農民の成年男子（二十一歳以上六十歳までの正丁といわれる課税対象者）を、三人に一人の割合で徴兵し、通常千人を基本とする兵士からなる軍団を各地に編制する制度である。奈良時代の全郷数は『倭名類聚抄』から4041郷と算定され、『令義解』に「凡戸五十戸以里（郷）為」とあり、一郷は五十戸であるので全国の戸数は約二十万戸になり、一戸一兵士で徴兵された⁽¹⁾と推定され、兵士数約二十万人である。奈良時代の人口は『正倉院文書』の戸籍から一郷の人口約千二百人と算定され、全郷数は4041郷であるから、約560万人（良民）となる。⁽²⁾人口約560万人に対して兵士数約二十万人の割合をみれば、大規模軍団制ということになるのである（現、陸上自衛隊数約十四万人）。

徴兵された兵士は、出身地に近い軍団に配属され、軍毅といわれる指揮官の下で兵士は五十人一隊を基本型に二隊百人・四隊二百に組織される。その各隊はおもに在地有力者が任命された大毅・小毅・校尉・旅帥・隊正から統率・教習される。⁽³⁾隊正二十人は各五十人の兵・旅帥十人は各百人の兵・校尉五人は各二百人の兵を積み上げ方式で編成統率し、長官大毅一人と副長官小毅二人は一団千人を統括した（軍防令・軍団大毅条）。さらに隊正が統率する一隊五十人を兵士五人を伍とする隊伍へ編成をおこない、馬の扱いにすぐれたものは騎兵隊（結果的には騎兵隊は在地の有力者が騎兵となった）、そ

の他を歩兵隊として校尉・旅帥・隊正は騎兵・歩兵をそれぞれに統率し、一隊のなかに騎兵・歩兵を相交えてはいけなかった（軍防令・隊伍条）。

備える武器についても細かく規定している。兵士みずから準備し、たずさえた武器・戎具は古墳時代以来の弓矢・弓具・大刀等の基本的なもののほか行軍・野営に必要な飯袋・工具なども携帯することを定めている。また携帯しなくてもよい武具・戎具には、十人毎に斧・小釜など、五十人毎に手鋸・火鑽（ひうち）等、集団で備えるべきものがある（軍防令・備戎具条）。反対に弩・長い矛の強力な武器や權威的武装用馬具のほか、大角・小角など部隊で行動するための軍事用楽器等、私的に保有することを禁じている武器・戎具もある（軍防令・私家鼓鉦条）。それは有力豪族層が私的な武力集団を形成するのを抑制するための令文とみなすべきである。⁽⁴⁾

各地から徴兵された農民兵士は、一部は中央の衛府である衛門府と左右衛士府に衛士として配属され、また一部は西辺防備をおこなう防人として西海道に赴き、それ以外の兵士は軍団に編成された。元来農民である兵士は軍事訓練を受けることによって戦闘能力を有する兵士となりえるので、徴兵制にもとづく律令軍団制において、『続日本紀（慶雲元年六月条）』によれば諸国兵士は団別に分けて十番となし、番ごとに十日武芸の教習を受けることになっていた。衛士についても衛府にて弓馬、大刀、矛、弩、抛石（城壁で敵に石を落とす仕掛け）を教習していたのである（軍防令・衛士上下条）。

軍団兵士の訓練は十集団（すべて歩兵の場合、一集団二隊百人）に分けられた各集団に、十日交替で年間計六十日間が課せられていた。兵士のうち有力農民が充てられた騎兵の場合は、支給された騎馬の飼育・調教することで訓練は免除され、年間に課せられた六十日間の訓練は歩兵中心の訓練であった。⁽⁵⁾ 教習内容は1. 弓術・矛・剣術・弩の武術教習で強力な弓である弩の教習は、各隊から二名ずつ選出された強壯者の弩手が行っていた（軍防令・軍団条）。だが徴兵期間での強制的な年間六十日の訓練では習熟するのに不十分であり、各個人の武術水準はあまり高くなかったと思われる。2. 一隊五

十人からなる隊の基本隊形（「陣列之法」）は、盾の後に兵士五人組みの伍が整列し、前列にこの伍が五組二十五人、同様に後列に伍を五組二十五人で合計五十人の隊形である。有事のときはこの隊形を崩さないまま、指揮官の号令どおりに整列・行進・突撃・後退等を行う様式を693年『日本書紀（持統七年）』陣法博士を派遣して全国画一的に教習していた。これは整然とした大規模な歩兵集団戦によって、兵士個人の武術の未熟さを補うためにも重要なものであった。3.『万葉集』の防人の歌に「皇軍」を意識する歌が随所にみられる。この「皇軍」意識は兵士個人の自発的意識とは思われず、訓練期間に「皇軍」意識をもたせる教育がおこなわれたのであろう。訓練された兵士たちは、これらの訓練における積極的な姿勢と士気高揚のため、年間一度軍団で国府勤務期間に騎兵も参加して国司からの検閲をうけ、成績優秀者は褒賞された。

平時において各諸国の軍団は国司の管理下におかれ、毎年国司が年齢・性別や個人の特徴などを記した課役徴収の基本台帳である計帳を作成して、徴兵兵士を確定し、武具・牛馬・船舶の帳簿とともに軍団を管理する兵部省に提出され、中央と国に保管・管理されていた。この各国の国司は兵士や武器の管理に関しては兵部省の管轄下にあり、兵部省は最高行政府である太政官に統轄され、行政上は太政官－兵部省－国司－軍団という指揮系統となる。すなわち平時の軍団は太政官の指揮下におかれ、国司はその国の最高軍事責任者であった。ただし有事の場合には、兵士動員数に応じて別に朝廷から節刀授与された大将を筆頭に指揮官数人が任命され、各国の軍団を指揮したのである（軍防令・節刀条，将帥条）。

当時の朝廷が、このような大規模な律令軍団制を成立させた目的は何であったのかといえは、七世紀初頭の推古朝以来、大陸や半島の動きの活発化に対応して中央集権の強化をはかり、軍事力の拡大と組織化をするためであったのである。

朝鮮半島では唐と新羅によって百済が滅ぼされた後も遺臣の抵抗はつづ

き、百済は日本に救済を求めてきたのを機に、朝鮮に軍を派遣することを決定した。ここに初めての中国王朝の軍隊と直接対決である海戦による白村江の戦い⁽⁶⁾がおこり、唐軍船団の挟み撃ち戦術により大敗を喫するのである。国内においては白村江の戦の後、わずかにして当時最大の内乱である壬申のが起こるのである。この戦いは全国の地方豪族軍までも動員しての乱で、両者が全国の兵を動員した全国規模の乱で、その深刻さを示すものであった。この二大大戦を経験した朝廷は、国家対国家の総力戦を想定し、海外に対する防備だけではなく国内の権力保持のためにも、地方豪族の広汎な武力を掌握することにより、国家に武力を集中するために律令軍団制を確立しなければならなかったのである。

三. 刀剣

攻撃用武器で敵に対し、手に持って両刃で突く事を目的とする武器を剣、片刃で主に斬る武器を刀といい、この剣と刀の中間形態もみられる。剣は湾曲しない直剣で、刀もほとんど直刀が一般的である。剣については、片手に剣をもち敵を刺殺する武器で、二、三十センチくらいの短剣から八十センチくらいの剣までである。元来祭器色が強かった剣は、しだいに鉄製の強力な武器⁽⁷⁾で敵を斬る刀の需要が増してくると剣は衰退していく。

律令国家成立以前より大和朝廷は大陸の隋・唐と交流をおこない、国内には多くの文物や武器も輸入された。『東大寺献物帳』には聖武天皇所有の「大刀壹百口」を遺愛の品として収められた目録があり、「唐大刀十三口・唐様大刀六口・高麗様大刀（こまようたち）二口・横刀（たち）一口・大刀（たち）六十四口・懸佩刀九口・杖刀二口」が記されている。このなかの「唐大刀」・「唐様大刀」の記載により唐の影響が大きかったことがわかる。又、「高麗様大刀」は朝鮮半島からもたらされた高句麗刀の様式で、他の大刀より刀身が長く多くの装飾があり、把の端が丸い環になっているのが特徴である。元来、高句麗刀の把の端が丸い環であるのは、戦闘時に手から落ち

ないように布で手首をまきつけるためとされるが、日本の「高麗様大刀」は刀身の長さや身幅の大きさから、実用刀として使用することを目的としたのではなく、有力者のみが所有する権威の象徴色が強い刀である。「横刀」は「大刀」同一とみなすのであるが、『東大寺献物帳』の「横刀」の注文には「刃長一尺四寸七分、鋒者偏刃」とあり、刃渡りが短く、日常において携帯する儀礼的要素をもつものと考えられる。しかし、横刀は日常儀礼的に宮中においても携帯することができ、この時代のかずかずの政変や政敵の暗殺に使用されたものと推測される。⁽¹⁰⁾大刀は、この横刀より刀身が長い黒作（こくさく）が大部分で、正倉院に現存する黒作大刀にみることができ、地下の武官にこの種の大刀が用いられたのである。

この律令国家成立期前後に使用された刀剣類の武器は、片手で刺突する武器である両刃の剣から、主に全長八十センチくらいで、刃渡り六、七十センチの片刃で鋒がふくらみのない直刀の大刀が主力となり、盛行するようになるのである。この種の大刀は実用的で剣にくらべて刃渡りや柄が長く、両手で柄を握ることができるようになり、相手を打ち斬ることに大きな効果をあげることができるようになった。だが、鋒にふくらみがないことから突くことは不向きで、切ることが主目的の実用的武器であったのである。

この黒作大刀の造りに鋒の部分だけが両刃に作られた鋒両刃造という珍しい形式がある。『東大寺献物帳』にはそれぞれの大刀の特徴を記しているなかで、「鋒者両刃」とあるのがこの形式であり、おそらく中国からの渡来品と思われる。この形式から考えられることは、突くことも斬ることもできる実用大刀といえるが、渡来品ということからすれば、中央の上級武官や地方の有力豪族の指揮官層だけが所持することができるものと思われる。そのことから十分に実用大刀として使用できるのであるが、この鋒両刃造の大刀は所有者の権威の象徴色が強い大刀といえる。

一般的に、この時代の大刀は斬ることが目的に作られたのは明らかであるが、この期の戦闘において、大刀はどのようなときに使用されたのかという

問題がある。古墳の副葬品からすでに馬を使用していたことは認められるが、馬上から敵に対して大刀を振りかざし、暫撃する方法は大刀が直刀造りという点から適切ではない。馬上からの暫撃法は、十世紀以降に成立する反りのある湾刀でなければ有効な方法とはいえない。それは、刀で斬るときは打撃をくわえて円を描くように引くことが肝要であるから、反りがあるほうが合理的だからである。よって、馬上で大刀を使用することはなく、大刀を使用する戦闘は白兵戦での徒歩戦が主な戦いであったのである。

しかし、前述した鋒両刃造のこの大刀を実際に使用しての戦闘で考えられるのは、歩兵戦で威力を発揮するとともに馬上での指揮官はこの大刀を持ち敵を威嚇し、片手で持ち突く・斬ることができる大刀を使用することで、騎馬戦や対歩兵戦で威力を発揮し有利な戦いが可能と思われる。

律令国家体制下での中央武官や地方で徴収された兵士は、軍防令により備える武器が規定され、その中に大刀が含まれている。平時の軍事訓練は中央武官はむろん地方兵士にも武事の教習が命じられ、大刀の操法についても訓練を行っていたと考えられる。訓練の内容については、当時、戦闘の勝敗は闘志・体力の強さで決定すると考えられ、敵の攻撃に対し、それに応じて受ける・かわすなどの後に反撃をくわえる技術は確立していたとは思われない。よって、大刀の握り方・振り方・斬り方・個別および集団攻撃法の初歩的な基本動作が中心であったと推測される。

四. 矛

矛は刀剣と同じく攻撃用の武器で、鋭利な刃部に穂袋がついていて、長い柄の先にこれに挿入し、通常柄の中央を片手に持ち、敵に対して突いたり投げたりするのが目的の長い刺突武器である。

この矛と同じような武器に槍があるが、槍は矛と違い刃部の基部が茎（なかご）になっていて、これを柄の先にはめこみ、柄を糸で巻いて漆をほどこし固めている。この槍に比べ矛は刃の先端である、きっさきが細身で鋭く、

刀身は一尺前後の無反り・両刃の両鑄造り（断面が菱型）・三角造り（断面が三角形）があり、柄は最短でも三メートルを越え竹を細く切って合わせた打柄という手法となっている。そのうえに糸などを巻き漆をかけ強化された柄との接続が奥行のある穂袋にはめこむという手法で、ぐらつかず安定していることから両手に持ち突き進んだり、片手で握り刺突することが主な使用方法であったと考えられる。

柄の長さについては短いものは三メートル前後から、長いものは四メートル以上のものまであり、長さによって使用方法が違っていた。矛はあくまでも柄に直角に突く武器であり、柄の長さに対する刀身部分が短く、柄が長大になるほど刃筋に沿って目標を正確に突くことが難しくなる。

しかし長柄矛の使用しにくい短所を補うために、馬上より戦う騎馬兵が片手に長柄矛を持ち敵に突進して攻撃を加えたと思われる。一方柄の短い短柄矛は長い長柄矛より使用する際に身のこなしがきき、使用しやすい長所があるので歩兵が持ち、散開する歩兵への刀剣の接近戦になる前の使用武器であったと考えられる。⁽¹¹⁾このことは高句麗の壁画や戦い方から推測できる。なお日本の律令時代に長柄矛をマケドニアなどの戦術で密集方陣にみられるような集団歩兵に持たせ配備しての野戦はなかったであろう。

矛の中には穂の元のところから鉤形の枝がでているものもある。これは長柄の武器として本来の目的とした対騎馬兵との戦闘用のものである。枝のように出ている支刃のある矛は、乗馬者を引掛けて馬上より引き落とす事が目的であるが、そればかりではなく、深い傷をおわせることもできる有利な武器で、大陸で騎馬兵との戦闘の経験から発展をとげ日本にもたらされたものとされる。⁽¹²⁾この鉤形長柄矛の戦闘方法に記録ははなく、この武器の特性から考えられる方法を推測してみる。

鉤形長柄矛の主な操作方法は、突く・引いて引掛ける・水平に振ることの三種類であることから、次の有効な攻撃方法が考えられる。

第一の方法は戦場の近くか戦場において攻撃に有利な場所で待ち伏せをし

て奇襲攻撃を行う。通常、鉤形長柄矛で騎乗者を引掛け引き落とす攻撃を加えるときは右手を前、左手を後ろに持って構えるものなので、攻撃側の待ち伏せ場所は、攻撃側から見て前進してくる騎馬兵の左側に位置しなければ有効な攻撃ができない。よって有利な待ち伏せ場所は、騎馬兵が移動する道筋をあらかじめ予測し決定する必要がある。騎乗者への攻撃は歩兵の前を騎馬兵が通過するとき、鉤形長柄矛を水平に振り、首をねらい一撃を加え、ただちに手前に引き騎乗者を引き落とす方法である。

第二の方法は二人以上の歩兵で、一人は騎馬兵が武器を持たない側から背後に回り込みながら攻撃を加え、他方の歩兵は騎馬兵の動きに合わせて、背後もしくは側面から首への攻撃を行い、騎乗者を引き落とす方法である。このような複数による戦い方は、中国では各人が得意な武器を持ち各々その武器の特徴を生かし、敵の首を取る数人での集団戦術⁽¹³⁾があり、日本にもこのような戦術が存在したことは否定できない。

以上二つの攻撃方法を推測したのであるが、馬に乗る騎馬兵は機動力があり、歩兵より上部から攻撃ができるので歩兵より有利に戦う事ができる。よって歩兵は騎馬兵と戦うには鉤形長柄矛を使用しての十分な訓練と経験が必要になる。

五. 弓矢

弓矢は律令制下においても武官の象徴で、刀剣・矛など接近戦に使用する白兵戦用武器に対して、遠距離より狙撃が可能な射撃用の武器であり、一斉射撃によって攻撃や防御を向上させることもでき、さらにすぐれた貫徹力は攻撃力を一段と高めることができる⁽¹⁴⁾。そして弓矢は狩猟用具から弥生時代に戦闘用武器の長弓として発達し、多くの経験から攻撃用武器としての特性をさらに強め、明らかに攻撃用武器の主流の位置を確立することになったのである。

日本の弓矢は木製弓を基本とし、自然木を利用した丸木弓と大木を割り削

った木弓がある。弓材は梓・檀（まゆみ）・櫨（はじ）・槻の類で、このうち梓弓・槻弓が最も多く、あまり太くない材は丸木のまま用いるので、木の成長する側（末）を上端とし、その逆（本）を下端として、両端に弓弦を掛ける弭を設け、上端を末弭（うらはず）、下端を本弭（もとはず）とよんだ。しかも本は太く、末は細い上に、本はすでに成木であるが、末は未熟なので、本は末より弾力があるので、上下の弾力差の均衡をとるために、弓射の際に握る弓柄を真ん中より下方に置き、本を削り、内部に細く浅い樋を入れた。寸法は七尺前後とし、世界最大級といえるが強靱だが弾力の少ない木製弓はしならず、引き絞りすぎると折れるため、引き絞らずとも威力が出るように長寸になっている。

『魏志（倭人伝）』に「木弓短下長上」とあるのは、握る弓柄を真ん中より下方に置くことをさすものであり、古墳・奈良時代を通して同様の形をなすものであると察知される。⁽¹⁵⁾なお平安末期に竹を伏せた合わせ弓として成立したこの短下長上の弓矢は中世以後もみることができ、わが国の弓の特徴といえるのである。

矢は使用目的で軍陣用の征矢（そや）・狩猟用の狩矢（かりや）・歩射の競技用の的矢（まとや）などの種類があり、鏃はそれぞれの目的により、征矢は丸根・柳葉などの細長い鏃を、狩矢は狩俣・平根の偏平の鏃を、的矢は先端を偏平にした木・角・金属の平題（いたつき）を用いた。

矢の容器である弓具は、鞞（ゆき）・胡祿（やなぐい）があり、ともに矢五十雙を納めるものであった。

鞞は、長方形の筒形の箱で、背板を高く、前板を低めに作り、上の口から矢をさし入れ、前板下部付近に手形という長円形の窓をえぐって、矢を抜き出せるようにし、右腰に負うようにした。胡祿は方位という鏃をさし込む小型の箱で後部の板を長く上方に延長させて、矢をからみ負い緒をつける背板とし、鏃を収めるだけで、矢並の乱れは背板の前緒で整えたのである。

律令国家成立以前にも弥生時代・古墳時代を通じ、『魏志（倭人伝）』にみ

られる記述や、遺跡・古墳から出土する武器などから国内において激しい武力抗争があったと考えられる。長崎県平戸市の根獅子遺跡からは鏃が刺さった人骨が発掘されたり、多くの古墳から細長く貫徹力のある実用性が強い鏃が大量に出土していることは、この時代からの戦闘の主要武器が弓矢であることがわかる。⁽¹⁶⁾

このように遺跡や古墳から出土する弓矢のほかに、『東大寺献物帳』には「梓弓八十四張・槻弓六張・阿恵弓張・檀弓八張…」の記載があり、正倉院には梓弓三張・槻弓二十四張がある。『東大寺献物帳』記載の弓は恵美押勝の乱に際し出蔵され、乱後に正倉院に返納したものであろうが、記載と合わないものもあり、代わりのものが収められたとされ弓矢の需要が多かったと考えられる。『続日本紀』には「大宝二年二月己未、甲斐国献梓弓五百張以充大宰府。同年三月甲午、信濃国献梓弓一千二十張以充大宰府」と記載があり、大宰府に弓を交付したとのことから実用の弓と知ることができ、この時代に弓矢が重要かつ需要があったと思われる。

『日本書記（神代上第六段本文）』にはの天照大神の武装描写があり、この姿は弓矢と剣とで武装した古代日本における理想的な武人像で弓矢を備えている。

大化改新の翌年、646（大化二）年正月に定めた「改新の詔（四条副文）」に刀・甲・弓矢・幡・鼓の武器武具を備えることとしている。また大化改新は宮廷の儀礼が大陸風に整備され画期的でもあった。⁽¹⁷⁾『日本書記（大化三年正月条）』には朝廷で射を行ったとあるのは、後世の年中行事としての正月十七日を中心とする大射という親王以下の射術競技が正史では初見の記述である。この大射は宮中における正月の行事として、675（天武朝四）年以降は毎年行われ親王も参加した。大射のことは令に規定され、文武朝の706（慶雲三）年には、射的の成績と位階に応じて賜る禄も制定された。このように皇族・貴族・官人層に弓矢をつうじての武術の習熟が要請され、特に弓矢の技術は重要視されていたのである。幾多の戦闘を経験してきた軍事制律

令国家は、皇族以下の武官に射術競技で技術を争わせることで、弓矢による武術と武官としての意識の向上を目的とし、中央集権化政策を推進する意図があったのであろう。

この時代以前から戦闘の始まりと戦闘の要は弓矢である。弓矢は遠距離から目標に向かって攻撃を行うもので、刀剣や矛を用いる接近戦より負傷する危険が少なく、弓矢を携帯しない敵との戦闘には有利であることはいうまでもない。国内では弥生時代から弓矢を使用した戦闘が行われており、律令期に弓矢と刀剣を携帯する歩兵と刀剣のみ携帯する歩兵の戦闘は考えられない。だから戦闘は双方弓矢の戦いから始まり、弓矢戦の勝敗を左右するのは軍陣用征矢の飛距離と威力であるから、弓・征矢の性能と兵士の技能・体力である。これらの差によって指揮官の死傷または敗走によるか、兵士の士気低下における総崩れで勝敗は決定する。

この弓矢戦が互角の場合、刀剣・矛による接近戦になると思われ、勝敗は弓矢戦と同様の形勢にて決まるが、白兵戦は弓矢戦に比べ消耗戦となるので、弓矢戦のみで勝敗を決するのが上策である。軍団制で前述したが、「伍」を基本隊とする「陣法」を重要視した訓練内容で集団戦術を実戦にもちいれば、盾一つに弓矢と大刀で武装した歩兵五人を最小単位となし、前列五単位二十五人、後列五単位二十五人の計五十人の一隊を一つの戦闘集団として組成する。盾を前面に置き盾の後ろに歩兵五人が位置し、この隊列を崩さず布陣したまま弓矢を射ながら敵陣に向かって前進する戦術が考えられる⁽¹⁸⁾。そのためにも強靱な弓とすぐれた征矢を製作することが必要で、兵士はそれを使いこなす技術と体力を養うための訓練が重要であったと思われる。

地方では国ごとに徴兵された軍団兵士は、前述したが自前で弓矢も含む武器を備えることが義務づけられていて、百人ずつの十個の集団が十日交替で年間六十日間の訓練を受けなければならなかった。元来武官ではない徴収された農民兵士であるから、兵士の個人戦術の熟達には限度があり、訓練の内容は、技術を要する弓矢より大刀を用いての突く斬るの基本戦術が中心で、

それとともに大刀を使う歩兵集団戦術を習熟することが目的であったと考えられる。⁽¹⁹⁾

弓矢の機械化した強力な武器に弩がある。もともと中国の漢唐代に盛行し、日本では『日本書記（推古二十六年条）』のとき高句麗からの献上品として記載されているのが初見である。

軍防令においては軍団の一隊ごとに強壯者二人を弩手に選んで扱い方の教習を命じ、国郡衙のほか衛門府・衛士府・兵庫寮にも弩をおくことを規定している。弩の製作と取扱を教授する弩師は、762（天平宝字六）年、藤原仲麻呂が大宰府に新設したが、ついで770（宝亀元）～81（宝亀十六）年には多賀城・胆沢城にもおかれた。近年多賀城において弩の鉄製引き金が発掘されていることからそのことがわかる。これらのことは対新羅関係の緊張や東北の蝦夷征討のために、その周辺諸国に守城兵器として弩を配備して防備の強化をおこない、『三代実録』などには蝦夷征討と西海防備に弩手・弩兵の活躍した記述がある。

実戦における使用は、藤原広嗣の乱における板櫃河（現、紫川、北九州市）の戦いである。『続日本紀』によれば740（天平十二）年、広嗣は約一万騎を率いて、板櫃河の西に陣し、みずから隼人軍を統率してその先鋒にあった。そこで広嗣軍は筏を組んでまさに河を渡ろうとした。それに対して、政府軍の勅使で六千人を率いる佐伯常人と阿部虫麻呂がこれに弩で応酬して渡河を阻止し、その後政府軍が勝利をおさめたとされる。この戦いでどれくらいの弩が装備され使用されたかは、一隊五十人に強壯者二人を弩手としていることから、一軍団は約千人の兵士であり、一軍団に四十人の弩手がいることからその数は推測できる。

時代はさがるが平安朝の914（延喜十四）年には、従四位上で文章博士の三善清行が天皇の求めに応じて提出した「意見封事書十二箇条（『本朝文粹』）」のなかで「縁辺諸國。各置弩師者。為防寇賊之来犯也。臣伏見本朝戎器。強弩為神。（中略）状望令六衛府宿衛等。練習弩射之術。其試其方伎。随其功

勞。充任件國弩師。然則人才名城戎易守。」と弩の武器としての威力と重要性を説いている。

国内では原形の弩は現存しておらず、朝鮮半島から出土したものから考えられるのは、機械しかけの引き金によって矢を発射する武器である弩は、強力であるがゆえに戦闘時の使用には弩自体に強い力がかかり、それに耐える性能が高い弩の製造技術が必要となってくる。また、わずかな誤差でも射撃性能を低下させると考えられ、高度な兵器製造工程は複雑になるであろうし、『延喜式（第四十九卷）』に「造弩一具單功六百冊三人」と製作に多数を要する構造で国内生産は困難であったと思われる。このような点と文献にある弩師という弩を操作する専門技術者不足が弩の衰退につながった。もうひとつに、この時代の国内での主な戦闘は野戦であり、強力である弩は矢を放つまでに弓矢より力と手間が必要で迅速性に欠けると⁽²⁰⁾思われ、攻・守城戦（特に守城側は上部のらの攻撃となり狙撃と威力で有利である）では威力を発揮する弩が活躍する場がなく無実となり消えていくのである。

六. 甲冑（かっちゅう）

刀剣・弓矢の攻撃用武器に対し自己を保護するための防護用武具がある。それは攻撃用殺傷武器の影響下で生まれ発展していった。その防護用武具は直接身に付け防護を目的とする甲冑があり、その形式には短甲と挂甲の二系統に分かれている。

まず短甲は後胴は肩までおおうことができ、両脇は手が動きやすいようにくりぬかれ、前胴の上縁は鎖骨のあたりまであり、後胴より低く、胸から胴にかけて身体の曲線にそりがあり実用的に製作されている。この短甲の付属品として、首のまわりを保護する頸甲（あかべよろい）、両肩に当てる肩甲、腰から大腿部を保護する草摺（くさずり）⁽²¹⁾などがある。

挂甲は小札とよばれる細長い鉄板を縦に並べ、革紐や組紐でつなぎ合わせたもので、短甲より体を自由に動かすことができる甲である。この挂甲は体

全体の運動が活動的であり、甲を身につけ騎乗しての移動や攻撃に支障が少なく、古墳の埋葬品や埴輪からみれるように騎乗がおこなわれることによって、大陸や朝鮮半島から取り入れられたものと考えられる。⁽²²⁾

『続日本紀（天平宝字五年条）』のなかに「住於唐国。事畢欲帰。兵杖様。甲冑一具。伐刀一口。槍一竿。矢二雙分付元度。」とある。そこに「様」とあり、これには手本・法式という意味がふくまれ、唐の様式を持ち帰り取り入れたと思われる。この翌年の『続日本紀』の記載には「造東海。南海。西海等道節度使料綿襖冑各二万二百五十具於大宰府。其制一如唐国新様。」と、おそらく「綿襖冑」という唐製の新様式甲冑を製作し、装備することに素早く着手し対応しようとしている。また「造綿甲冑一千領以貯鎮国衛府。」と「綿甲冑」の記載があり、これらの唐製の新様式甲冑は、元来の挂甲を軽量化し、行動を迅速にするために綿製品と革製の小札とで作成されたものと推測される。⁽²³⁾

古墳時代を通じての基本的な戦闘形態は弓矢戦と刀剣を用いた白兵戦である。これらの武器に対する防護用武具である甲冑の必要性が出てくる。この甲冑で防護した敵を倒すには、さらにより強い攻撃用武器が必要になることのような相互作用は、武器・武具の発達と変遷に影響を与えた。鉄製の挂甲は動きが比較的自由がきき、騎乗したとき全身武装しても支障がなく上層武官である騎馬兵がこれで武装した。歩兵の場合は歩く・走ることがおもで騎兵と同じ挂甲では重量があり支障が多く、鉄製挂甲より簡素化された軽量の綿甲冑が多く製作され使用されたと思われる。

七. 馬

戦闘に関して戦闘能力を高めるために補助的役割をする馬がある。わが国において最初に騎乗の風習が発生したのはいつ頃であるかという問題であるが、一般的には古墳に副葬される金属製品を主体とする馬具が発見された、その古墳の時代をもって騎乗の出現とみなしている。その時代から律令期に

おけるまでに騎乗目的の変遷は馬具によって、およそのことが知ることができる。

大和朝廷によって国内統一がされた後も朝鮮半島に進出した朝廷は『広開土王碑文』や『宋書（倭国伝）』にある宋の皇帝に送った上表文により朝鮮半島で勢力を強めた高句麗と争ったことが知られている。

『日本書紀（欽明十四年十月条）』に高句麗軍と百済の王子との戦闘の記述があり、高句麗軍は鼓吹と旌旗を使用した騎馬兵である武将の指揮下による集団戦法をとっている。ここにでる高句麗軍騎馬兵の姿は、高句麗古墳壁画に描かれている状況から、防禦武装をした馬に騎乗し長槍を持った挂甲を身に付けた重武装の騎馬兵である。高句麗軍は壁画にある姿の騎馬兵が軍団の基本であり、『三国史記』の記録から騎馬兵は戦闘時には最先頭に立ち敵陣に突撃したとされ、当時の朝鮮での戦闘は先陣が騎馬兵を中心とする集団戦法であった⁽²⁴⁾ということである。この朝鮮で倭の武将が新羅の武将と騎馬で戦ったことが『日本書紀（欽明二十三年七月条）』に記述されており日本でも騎馬兵が存在し、朝鮮から騎馬兵としての武装・戦術を取り入れ軍用の馬が重要視されていたと思われる。

日本国内においては672（天智十一）年に古代最大の内乱である壬申の乱が起きるのである。この乱の弘文天皇に対する大海人皇子の作戦計画は、美濃安八磨郡（あはちまのこおり）の食封を作戦基地とし郡の人員を動員して主力兵力とし、東国の国司の軍を招集して主力部隊を編成して、その兵力を持って奇襲攻撃に先制攻撃に出ることで弘文天皇の大津京を襲撃することであった。そこで大海人皇子はこの作戦の遂行のために美濃の兵三千人を発して重要拠点である鈴鹿・不破をいち早く押さえ、美濃に本拠を置き東国の兵を集めたのである。この大海人皇子の武力はどのようなものであるかといえ、大海人皇子に従う舎人や私領である美濃国の湯沐邑（ゆもくむら）の武力、伊勢・尾張諸国から東海・東山二道からの募兵と大伴吹負がひきいる三輪・鴨・倭漢（やまとのあや）など奈良盆地の在地領主勢力であった。こ

これらの兵の中に騎馬兵が多くを占めていたと思われ、それは『日本書紀』の記述から、大和に挙兵した大伴吹負を救援するために伊勢から兵を進めたのは置始兎（おきそめのうさぎ）を将とする約千騎の兵であったことや、白馬に騎乗した近江の将廬井鯨（いおいのくじら）と騎馬兵である「甲斐の勇者」との戦闘からも察することができる。一方、弘文天皇方の将田辺小隅が得意の騎馬隊を率いて合い言葉を使つての夜襲を敢行し、倉歴に配備したばかりの大海人皇子方守備隊に勝利している。このように壬申の乱では、機動性⁽²⁵⁾にすぐれた馬を使用した騎馬兵による戦闘がおこなわれていたのである。

それではこの時代における騎馬兵による戦闘方法はどのようなものであり、どのように馬を活用していたかを検討しなければならないが、『日本書紀』などの記述には騎馬兵における直接個々の戦闘描写がほとんどみあたらない。ただし現存する武具・馬具の部類からおおよそのことを察することができるが、これについての武具・馬具からみた騎馬民族説やそれを否定する論争などがあり、これらを論じるのではなく当時の騎馬兵の姿や戦術のみをとりあげる。

現在の騎乗用馬具は銜（はみ）・轡（くつわ）・鐙（あぶみ）・鞍部からなるが、当時の騎乗の風習を考えるには馬装が遺物として発見される場合に完全な姿のものは少なく、その他の馬装具をとおして考慮しなければならないことが多い。中には装飾としての馬具もあり、騎乗の目的や歴史的な相違によって馬具の構成が異なるものである。

日本国内においては古墳時代から律令期にかけて金属製の銜・鐙の発達により、戦闘に適した騎乗用の馬具を伴う騎乗に変化していった。ただ騎乗するためであれば轡のみ備えていれば騎乗は可能であるが、戦闘となれば馬上での踏ん張りがきくように鉄製輪鐙とその鐙を備える鞍が必要である。これらの馬具を装備し自ら挂甲で武装することで、馬の機動力を利用した馬上から矛を持って敵に攻撃を加えることが可能となる。なお弓矢を用いて馬上からの攻撃が考えられるが、この攻撃は適当な距離をたもち敵に最接近したと

き矢を射る戦術が適しているが、日本の弓矢は長弓であり馬上からの弓矢における実戦攻撃は、弓自体が長いため弓が馬に当たることがあり適当ではなく実戦にはむいていない。馬上からの弓射は強く湾曲した弾力が強い短弓が適しており、そのことはこの短弓を使う高句麗の古墳壁画から短弓を使用しての騎乗弓射をおこなう武人の姿から知ることができ、この時代には長弓を使う日本の戦闘では騎乗弓射はおこなわれなかったと思われる。

当時の武人が携帯する主な武器は弓矢・大刀・矛で、馬上からの攻撃は前述のごとく長弓である弓矢と直刀の大刀は不向きであり、この武器の中では矛が馬上攻撃に最上である。この矛による馬上攻撃では、全身を挂甲で固め片手に矛をもった騎馬兵がお互いに向かって突撃し、すれ違い時に矛により攻撃を加える西洋式の騎馬戦は『記紀』などの記述から考えられず、弓矢戦や白兵戦で勝敗が決した後、敗走する兵士を馬の機動力を活かし、追撃することが騎馬兵による主な戦闘であったと考えられる。また敗走する兵士の退路を騎馬兵により遮断し、背後からの歩兵との挟み撃ちにする連携した戦術もあったと推測される。

律令制成立期の戦闘には騎馬兵の働きが多く、武力の重要な支えとなる馬は重要視され、国家は馬の軍事・伝達の必要性により、この軍馬供給のために諸国に郊外で馬牛を放し飼いにする「牧」を設置していたことが『記紀』に記載されている。七世紀の初めには馬の飼養の面でも組織化が進んでいき、令制において馬の調教・飼育を担当するのは左右馬寮で、そこには調教・飼育を専門とする馬部・飼丁が所属していた。このように馬の必要性が生じたのは、当時より馬は軍用馬として活躍することが多く戦闘には欠かすことのできない存在となり、乗馬を乗りこなすことがすぐれた強い武人の条件になっていったのである。⁽²⁷⁾

七. 兵法

兵法は戦場での幾多の実戦経験と理論的思考との相互作用による、一般的

原理から特殊的事実の意義を認識することにより確立されていくものである
ので、兵法家は理論と実践に卓越した能力をもつ軍事家でなければならな
かった。実戦とともに必然的に軍事の歴史的環境や地域の特殊性を受けて発展
した兵法のなかに、特にすぐれた孫武の軍事理論である中国古代の『孫子』
の兵法がある。この『孫子』の兵法は717（靈龜三）年に留学生として入唐
し、十八年の留学生活において主に軍事を学んで帰朝した吉備真備によって
日本にもたらされたことは『続日本紀』により知ることができる。⁽²⁸⁾

吉備真備が持ち帰った軍事に関する武器類は『続日本紀(天平七年四月条)』
に記述があり、それをあげると①測影鉄尺一枚。天文関係の用具であろう。
②胴律管一部。③鉄如方響。④写律管声十二条。②～④は軍事用の楽器であ
るらしい。⑤絃纏漆角弓一張。⑥馬上飲水漆角弓一張。⑦露面漆四節角弓一
張。⑤～⑦は騎兵用の角の弓で日本にとっては新兵器であろう。⑧射甲箭廿
雙。⑨平射箭十雙。⑧・⑨は矢の種類。以上である。このほかにも留学中に
学んだと思われる築城や兵法についても著しく、真備の昇進は軍事に関する
機会に多く見られる。⁽²⁹⁾

これ以前は「軍防令」によって諸国に軍団を構成し、規定された「陣法式」
によって訓練されており、有事の場合は諸国軍団兵士を作戰地点に結集させ、
軍団単位に戦時体制の編成をおこない作戰會議において各軍団の配地・布
陣・目標地の占拠・行軍経路等を決定し作戰を遂行するようになっていた。
戦闘単位は前述したように、大盾に弓矢と大刀で武装した五十人一隊を最小
単位として弓矢を射ながら敵へと前進していくものであり、軍事理論に基
づく戦略はみあたらない。壬申の乱においては、吉野方の迅速な行動による重
要拠点の進撃により、吉野方は近江方の作戰を封じ、退路を遮断し各戦場
において撃破して最終的に勝利した。この戦いで合い言葉を使ったりする計略
はあったものの軍事理論による兵法といえるものはなかった。

帰朝後の真備は754（天平勝宝六）年から763（天平宝字七）年まで大宰府
において大宰少貳、続いて大貳として在任した。大宰府在任期間には756

(天平勝宝八)年、真備の指揮下に筑前怡土城を築城した時から築城術に堪能なことは中央に知られていた。759(天平宝字三)年には恵美押勝は新羅征討ため大宰府に行軍式を造らしているが、この行軍式とは教練の形式や戦闘の原則などを規定したものと思われ、おそらく真備によって作られたのであろう。760(天平宝字四)年に中央は授刀舎人春日部三関・中衛舎人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣わし、真備に就いて「諸葛亮の八陣」,「孫子の九地」,「結営向背」を習得させており、真備の中国兵法が重要視されていたことがわかる。

真備が大宰府の任を終え入京したのは764(天平宝字八)年の正月で、この年九月に恵美押勝の乱が起こり真備は中国兵法を応用してこの乱を鎮圧している。

この乱において押勝の戦略は、宇治から近江の中原に⁽³⁰⁾出て、愛発・不破の関との連絡を確保し、近江一円を確保することであった。これに対し真備の押勝対策は朝廷からの追討の任命が遅れたことで、出遅れたため最初不利であった。そこで真備のとった戦略は、宇治から近江の中原にむかう押勝を追うことはせず、鈴鹿・不破・愛発の関を固守させ遁走すると思われる要所を押さえた。押勝は近江に進んだが近江国淡海真人三船らと援軍数百騎が防戦し、勢多の橋を焼き押勝軍は進軍することができず高島郡に引いた。真備により要所は押さえられており高島郡で戦闘となり乱は17日で終結した。この戦術は押勝を追うことなく要所を固めたことは迅速ではなく迂のようであるが、これは「迂」をもって「直」とする『孫子』の兵法の「迂直の計(戦争編)」を実行したものであった。この乱は真備による『孫子』の兵法の応用による鎮圧であるが、中国兵法を習得し実戦に応用できる人物は唐の留学生である真備など一部の者に限られており、このように中国兵法を自由に駆使できる武将は少なかったと思われる。

八. むすび

国内における現存する武器・馬具や『日本書紀』などにみられる記述の特徴からだいたいの古代武人の姿うかびあがってきた。甲冑で身を固め大刀を腰に差し弓をもった姿が一般的な武人であった。武器においてはいろいろな種類があり、それらの武器の長さや長所を活かす戦いの方が考えられ、各個人の体格体力によっても武器の長短、重量も違ったものを使用したと思う。弓や、大刀は常備の武器でありその他にも個人の得意とする武器を携帯し戦闘にはそれを使用したとも思われる

武器は戦乱を機に強いものへと変化をし、より有利な武器が飛躍的に発達する。戦闘方法も敵の弱点への攻撃も考えられ、集団戦における戦術では規定された訓練により、各個人画一された行動による集団戦術を生み出した。個人的な戦闘では、敵への攻撃法や敵からの攻撃に応じて反撃をする高等技術は確立しておらず、流派といわれる攻撃・受け・反撃の形が確立するのは戦国時代末期まで待たなければならない。矛や大刀のように接近戦で使用する武器とは違い、遠距離から攻撃する弓矢は、古代から戦闘開始時の攻撃武器で又攻撃の主力武器でもあった。古代より武人は遠距離から攻撃できる弓矢に熟達し、機動性のある馬を乗りこなすことが求められ、中世から近世への武士へと受け継がれていくことになる。

武器や個人・集団戦術の発達とともに中国から理論化された勝利に導くための兵法が入ってくる。この兵法は戦争を国家の大事として、勝敗を決する要素を体系的に規定している。内容は気候・地形を考慮しての戦機、敵に対しての対処法、将の気質など勝利の法則といえることを細かに論じている。日本の多くの戦国武将も『孫子』の兵法を参考に自国の家法を作成している。現在の日本にも兵法に関心をもつ政治家が多くいることを聞くが、それは軍事的な活用ではなく、政治・外交・対策などに向けられているのではないだろうか。我々が自分自信の危機への対処や行動を起すとき、先哲が残した書物を読んだり、歴史的戦乱をみつめなおしたりすれば、人としての倫理的規

範や武将の戦略・対処・決断など適切な判断をした武将が勝利した史実が多くあり、現在の生活において参考になるであろう。

注

- (1) 直木孝次郎「律令兵制についての二、三の考察」－『飛鳥奈良時代の研究』塙書房 1975 現実には一戸一兵士と推定される。
- (2) 昭和初期に沢田吾一によってなされ、賤民を加えれば約600万になるとされる。
- (3) 角田文衛「軍団と衛府」－『西田先生頌寿記念日本古代史論叢』参照 吉川弘文館 1960
- (4) 笹山晴生『古代国家と軍隊』中央公論社 1985 P64
- (5) 下向井龍彦「律令軍制と国衙軍制」－『人類にとって戦いとは2』東洋書林 1999 P85
- (6) 下向井龍彦 前掲書(5) P90参照
- (7) 末永雅雄『増補日本上代の武器』木耳社 1981 P110
- (8) 古代の反りのない刀剣を「大刀」、反り・鑢があり現在でいう日本刀の姿をする刀剣を「太刀」としている。
- (9) 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学研究所編『高句麗の文化』同朋舎出版 1982 P72
- (10) 聖徳太子が大刀をさげている絵から宮中においても有力者層は大刀を帯びていたと思われる。
- (11) 前掲書(9)『高句麗の文化』 P70
- (12) 前掲書(9)『高句麗の文化』 P71
- (13) 林巳奈夫『中国殷周時代の武器』に五人が違う武器を持ち、五人一組となる集団戦術を論じている。
- (14) 西川宏「武器」－『日本の考古学V』河出書房 1966 P257
- (15) 末永雅雄 前掲書(7) P257-259
- (16) 森岡秀人『弥生文化－日本文化の源流をさぐる－』平凡社 1991 P115-116
- (17) 笹山晴生「文献に見られる戦術と武器」－『日本古代文化の探求－戦－』器』社会思想社 1984 P140-141

- (18) 下向井龍彦「日本律令制の基本構造」『史学研究』175 参照
- (19) 胡口靖夫「律令軍団制の軍事訓練制度」『続日本記』211 参照
- (20) 末永雅雄 前掲書(7) P288-289
- (21) 上田宏範「日本古代の武器」前掲書(17) P84-88
- (22) 上田宏範「日本古代の武器」前掲書(17) P88-92
- (23) 宮田俊彦『古備真備』吉川弘文館 1988 P146-147
- (24) 前掲書(9)『高句麗の文化』P81
- (25) 関晃「甲斐の勇者」-『甲斐史学』1 参照
- (26) 前掲書(9)『高句麗の文化』P64
- (27) 吉沢幹夫「古代軍制と騎馬兵力について」-『律令国家の構造』吉川弘文館 1980 参照
- (28) 宮田俊彦 前掲書(24) P44-45
- (29) 宮田俊彦 前掲書(24) P154-159
- (30) 浅野裕一『「孫子」を読む』講談社 1994 P138-145